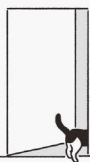


## 書評

医療・ケア従事者のための  
哲学・倫理学・死生学医療・ケア従事者のための  
哲学・倫理学・死生学

清水哲郎



哲学の扉を開けてみる。

臨床では、常に「どうしたらよいか」を判断する場面に出合います。  
状況を適切に把握し、的確に実行に移す力が  
医療・ケア従事者に求められているのです。  
自らの実践を振り返り、  
ケアする姿勢と専門的知識や個別状況を把握し整理するために、  
哲学と倫理学、そして死生学の新しい扉が開きます。

医学書院

- 著 清水哲郎
- 定価 2860 円(本体 2600 円+税 10%)
- 判型 B5
- 頁数 284
- 発行 医学書院

評者

北海道医療大学 名誉教授  
石垣靖子臨床の「どうするか」にこだわり、  
考える道筋を示す

1986年4月、医療現場と哲学・倫理学者（ことばの専門家）とのコラボレーションの扉が開かれた。当時、私が看護部長を務めていた東札幌病院で開催されていた「倫理セミナー」に、講師として清水哲郎先生に参画いただいたことがそのきっかけとなった。実は先生は患者の家族として病院を訪れていたのだが、ほどなく哲学の専門家として医療現場の扉をノックしてくださったのだ。

それから30数年、哲学者は医療の現場に深く関わり、そこで繰り広げられる1つひとつの事象に対して、医療・ケアスタッフに誠実に付き合い、臨床に携わる者のことばのあいまいさにも根気よく寄り添い、共に歩みながら新しい臨床の倫理を築き上げてきた。

人と人との関わりの中で成り立つ臨床は、ことばのやり取りで進められる。時には同じことばを使っても異なる方向に進んでしまうもどかしさに悩むこともしばしばあった。そんな時、ことばの専門家は、「あなたたちがしようとしていることはこういうことですね」、「あなたたちが問題としていることを分析し、整理するとこういうことになりますが、これでいいですか」<sup>1)</sup>と対話を繰り返しながら実現したい姿を映し出してくれる。

立ち止まり、  
日常の医療・ケアを省みる

本書では、このような臨床でのやり取りを続けながら、日本各地の医療・ケアスタッフが取り組んできた臨床倫理セミナーで積み重ねてきた成果が丁寧に解きほぐされている。

本書は4部16章から成っており、著者が「はしがき」で「臨床における『どうするか』」の判断に注目し、その構造を理解し、自らのケアに向かう姿勢について省み、また、判断において使っている専門的知識、個別状況の把握を省みて、そうした知の実質を過不足なく評価できるよ

うになることを目指しています」と述べているが、これは著者の一貫した姿勢であり、最初から変わることはなかった。

「はしがき」は続けて、本書の内容を最初から順に概説しているが、それは読者をして哲学と倫理の旅に誘ってくれる。医療・ケアに携わる者が、意識せずに行っている日常の医療・ケア実践について、立ち止まり、その意味を振り返り、省みることによって、さらなる知を得ることができることを示唆している。

## 根本に立ち返って考えること

著者はかつて、「医療者が患者に向かう際の視点に立って現場を把握し、「医療とは何か」、「医療の専門家は患者にどのように向かうべきか」といったことを根本的に考えることは、医療実践の専門家にとっては当然のことながら、医療について考えようとする者すべてにとっても少なくとも一旦はすべきことであろう」<sup>2)</sup>と、医療現場における考えること（哲学）の重要性を述べている。本書は全ての臨床に携わる者にとって、それぞれの日常をあらためて俯瞰し、省みながらも、そこに新たな光を見いだしていく道筋を示してくれるはずだ。

この30数年間、著者は常に医療者と医療現場に敬意を払いつつ、患者・家族の最善を目指して医療チームの「どうするか」について建設的な話し合いができるようにさまざまな形で具体的な支援を続けてきた。

著者がこれまでに成してきた数々の取り組みの価値はことばに代えがたいものがある。心からの感謝と敬意を表すとともに、医療・ケアに携わる全ての人に一読を薦めたい。

## 引用・参考文献

- 1) 清水哲郎：医療現場に臨む哲学。4、勁草書房、1997。
- 2) 前掲書1)、iii。